

(152) 栃木県小百川上流の浅田銅山

参考文献（１）には、モリブデン鉱床として４つの鉱山が紹介されている。その内の３つは探査済みであった。残っているのは、「今市鉱山」。文献の記述によれば、その位置は「・・・小百川上流の西岸に位置し、小休戸部落の西に当たる。・・・」 大きい鉱山ならば、近傍に行けば現地の確認は容易であろうが、小規模な鉱山で、何十年も前に閉山した鉱山では、これだけの情報では、現地の確認は不可能に近い。実際、２回程、小休戸部落の西あたりを徘徊してみたが、何の結果も得られていなかった。

栗山鉱山の探査を一緒に行った岩友に、この今市鉱山について話をしてみた。思いもかけず、良い情報を教えてくれた。参考文献（２）を紹介された。その文献中に「浅田水鉛銅山」が紹介されており、その位置は「・・・小百川上流小休戸部落を去る北方数丁にあり・・・」の記述があった。文献（１）とは鉱山名が違っているが、同じ鉱山でもしばしばその名が変わることがあることは著者には既知のことである。が、小休戸からの方向が、西と北の全くの方角違いである。鉱山を紹介している資料どうしで、このような違いは少なくはないことも、著者は重々承知している。更に、文献（２）の方は沢名などの記載もありより正確な資料と考えた。この浅田水鉛鉱山は、今市鉱山の名を持っていたこともあったのではないかと考えた。とにかく、参考文献（２）を手引きに、この浅田水鉛鉱山を探索しようと決めた。

「浅田水鉛銅山」と鉱山名が表記されている通り、この鉱山は水鉛と銅を産出した。沢の下流部に水鉛鉱脈、そして大分上流部に銅鉱脈があった。この２箇所、探掘を行った。数回の探査を行ったが、残念ながら水鉛鉱床跡は未だ確認できていない。が、銅鉱床跡は確認できた。２箇所で露頭鉱脈を、１箇所で坑口跡を確認した。又現地付近で良好な拳大の黄銅鉱豊富な転石標本も採集することができた。水鉛鉱床は確認できていないが、銅鉱床は確認できたので、「浅田銅山」について探査結果を報告する。

現時点での判断。浅田銅山はここで紹介する場所にあった。が、近傍下流に構築された砂防ダムにより河床が上昇し、鉱山跡の大部分は土砂に埋もれてしまった。

現地への経路は次の通りである。今市当たりから、小百川沿いの２４５号をほぼ北上していく。１軒だけの廃屋がある小休戸から約１．５kmの所の大きな急カーブの付近から、沢に降りる。車は駐車できそうな道幅の所に止めると良いであろう。

「浅田水鉛鉱山」は「浅田銅山」の下流にあるはずである。未だ確認ができていない。是非とも現地を確認したいものである。

探査日 ２０１７年９月、１０月

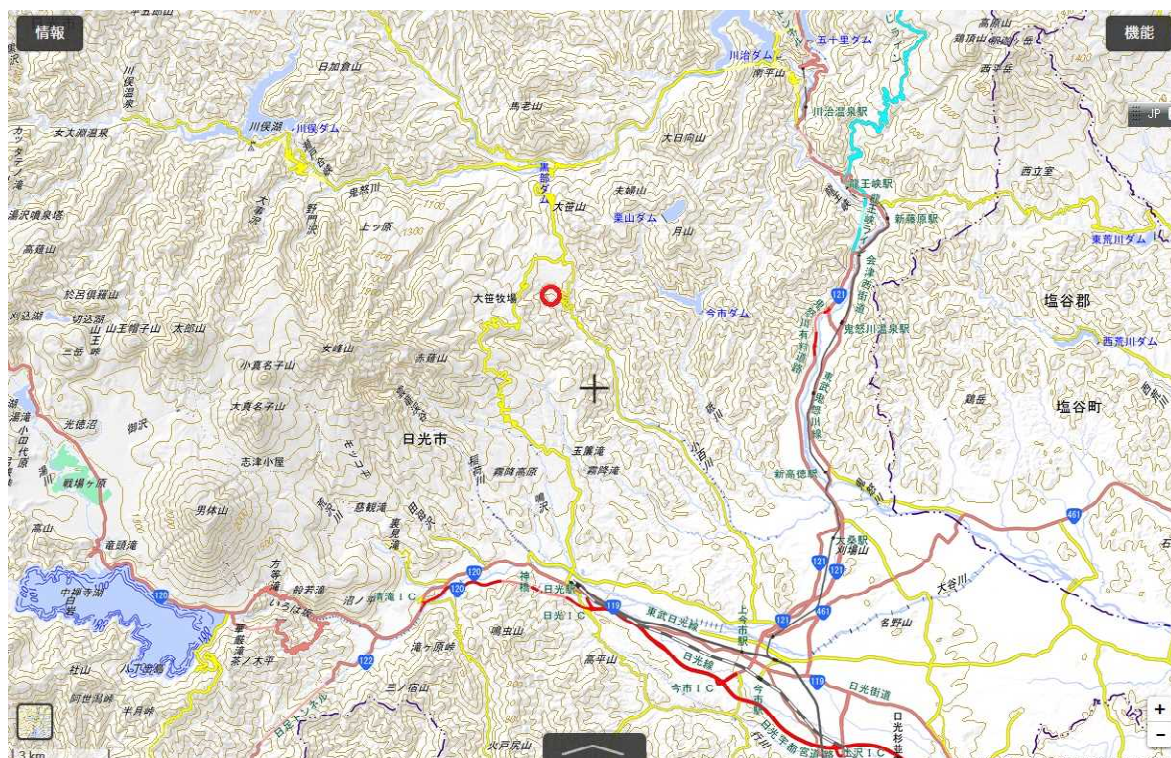


図１ 中央付近の赤丸が浅田銅山跡。今市当たりから小百川に沿って２４５号を北上していく。

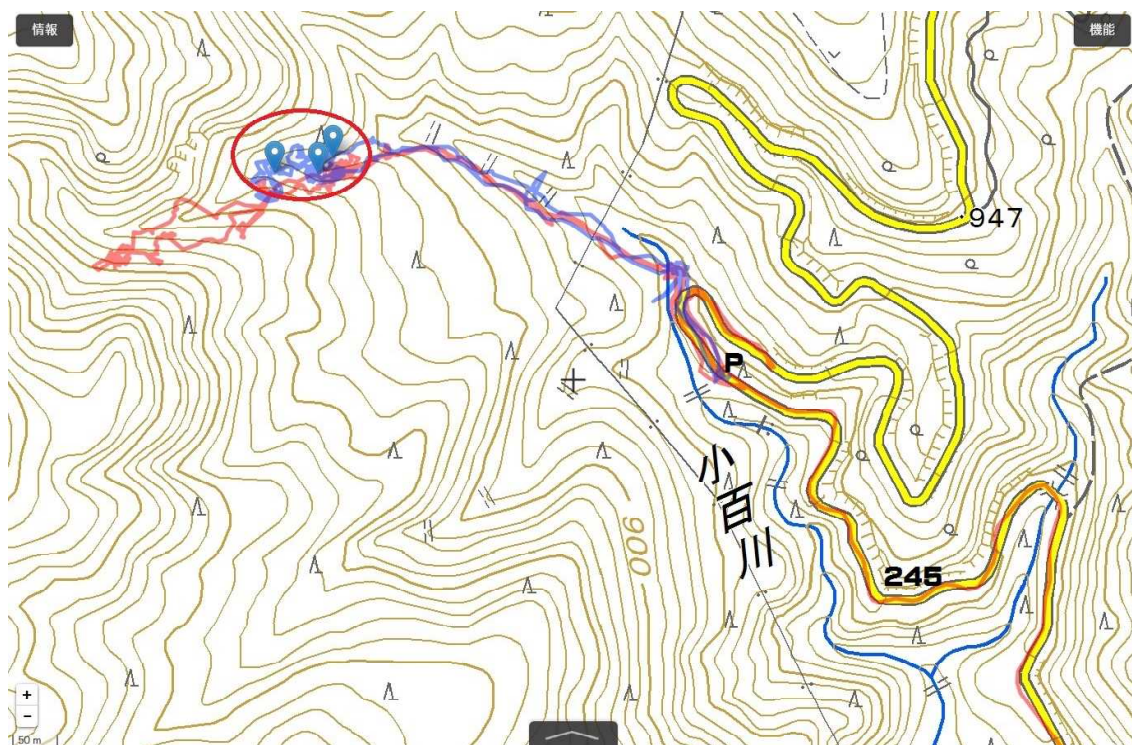


図2 数度の探査経路ログを重ねて描いている。245号の急Uターン部付近(P点)に駐車し、直ぐに沢に降りた。図中では「小百川」の記載があるが、文献(2)によれば、この沢は「カペラ沢」。沢の右岸は広くて傾斜は緩いので歩き安い。若干の踏み跡道もある。幾つかの砂防ダムを通り過ぎ、下地となっている地形図には記されていない最上流の砂防ダムの上流部が現地である。赤輪で示している。P点から徒歩で20分～30分。

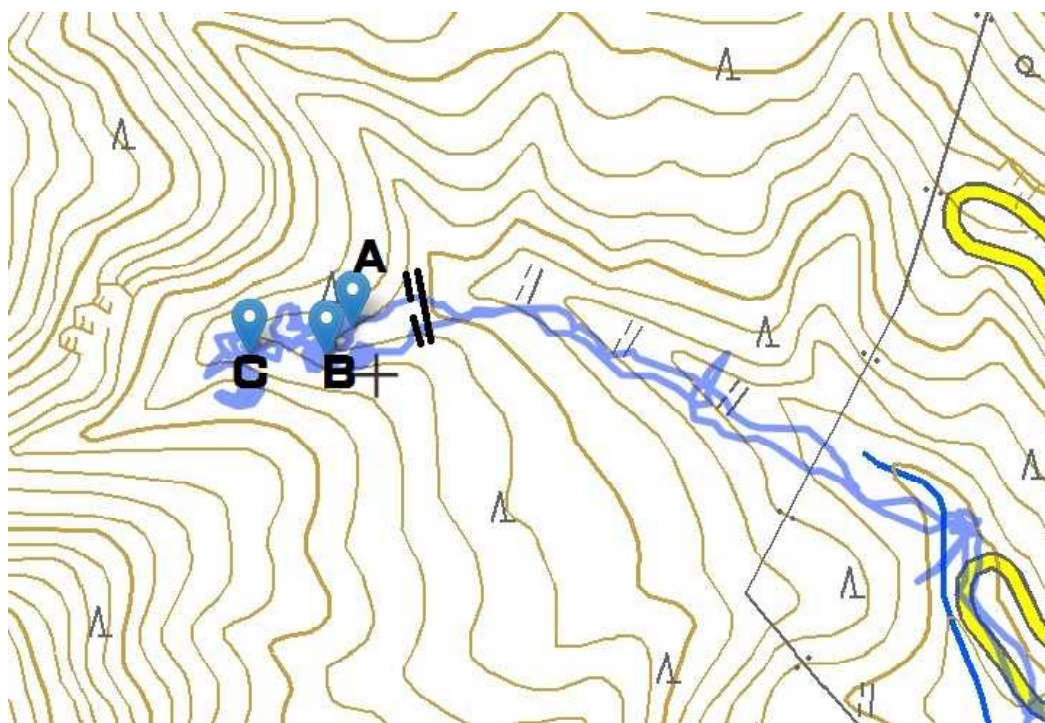


図3 図2の現地付近の拡大図。地形図には記されていなかった砂防ダムを追記している。沢の左岸のA点、右岸のB点が露頭鉤脈。右岸のC点に坑口跡を確認。また、この付近の右岸には多段の石垣組がある。鉤山のためのものであると思うが、何のために組み上げたのであろうか？ わかっていない。

鉱山跡写真



写真1 245号を上り、小休戸（現在1軒の廃屋があるだけ）から約1.5kmの所の急カーブ。カーブミラーのある所から沢に降りる。沢を横断し右岸に入ると、広くなだらかな斜面が続く。消えかかっている道を進んでいく。歩き易い。

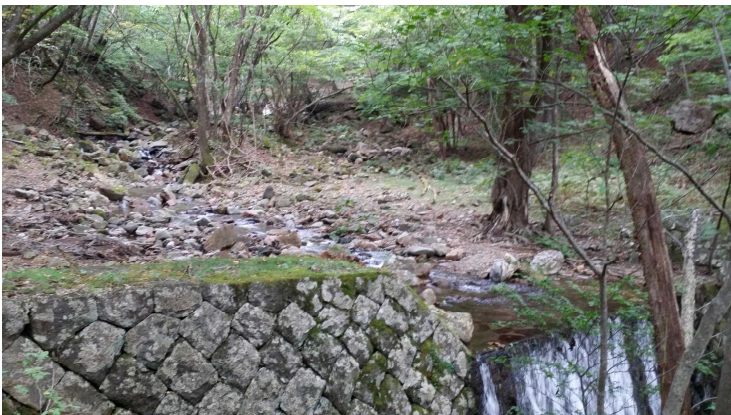


写真2 幾つかの砂防ダムを通り過ぎ、これが確認したところの最上流の砂防ダム。「浅田銅山」の現地である。ダム上の堆積土砂平地の両側に、露頭鉱脈、右岸に坑口跡を確認。黄銅鉱の豊富な転石も採集。結論として、この砂防ダムへの土砂の堆積により、河床が上がり、鉱山跡の大部分が埋もれたものと考えた。



写真3 中央の黒い部分が、右岸、沢水準にあった坑口跡。図3中のC点。

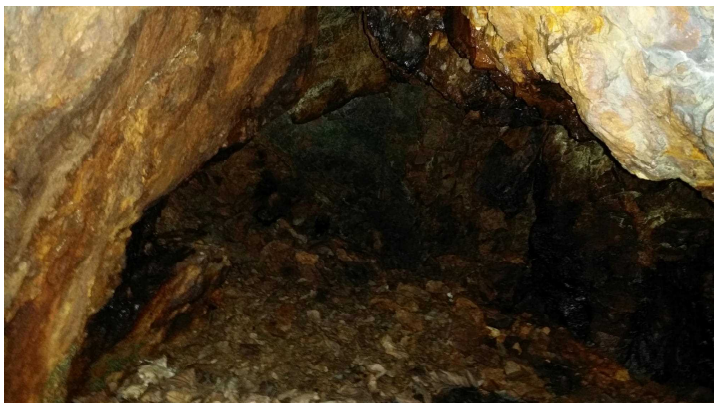


写真4 写真3で示した坑口の内部の様子。奥がなさそう、下部は土砂で一杯。砂防ダムによる土砂の堆積で河床が上がり、土砂が流れ込んだものと判断。



写真5 沢の左岸の沢水準にあった露頭鉾脈。図3中のA点。



写真6 沢の右岸、これも沢水準にあった露頭鉾脈。図3中のB点。



写真7 沢の右岸にあった多段の石垣。沢水準にもあった。何のための石垣？わからない。鉾山施設であったろうとは思うのだが。

採集鉱物



写真8 両拳大の茶色っぽい石にハンマーを入れた。黄銅鉱豊富な鉱石であった。



写真9 右岸側の露頭鉱脈にハンマーを入れて、良好な標本を採集。中央の表面が白い物。

参考文献

- (1)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。
- (2)「東京鉱山監督局管内 金属鉱山（鉱業叢書第三編）」、小山一郎、鉱業社、昭和15年。